

浮塵子の発生豫察に関する研究

第3報 表日本に於ける発生年の異常気象

末 永 一

九州農業試験場

Suenaga, H. Studies on the outbreak-forecast of rice leaf hoppers (II)

浮塵子*の主要発生年に於ける気象が平年に較べて如何なる時期にどの様に偏っているかを、表日本即ち既に述べた南日本区の各地測候所について、明治30年から昭和16年までの1月乃至8月の月別の資料で Macroclimatic に平年との偏りを調べた。茲には主として1~6月の月平均気温、月平均湿度、月降水量、月日照時数等と夏期の浮塵子の発生との関係の概要を述べる。

月平均温度 浮塵子の発生条件の一つに暖冬を挙げている既往の記録もあるが、暖冬の年に必ずしも発生せず、発生した年の多は必ずしも平年より高温とはなっていない、けれども著しい低温の年にも夏浮塵子の発生を見ていないので、著しい低温の冬を除く外、多期の気温は浮塵子の発生或は抑圧に因聯するものとは思われない。明治30年、昭和15年の如きは一般に4月が低温であるが明治45年は平年より稍々高い等の様に、4、5、6月の各月平均気温の高低とその年の発生との間には明瞭な傾向を認め得ないが、明治30、45、昭和15年の如く広い地域に亘つて発生を見た大発生年の4~6月を通じての平均気温は平年より稍々低いことが窺われる。

月平均湿度 多期各月の乾湿とその年の発生との間には一定の関係を認め得ないが、大発生年の4、5、6月の関係湿度は一般的に低い。然し処々に起る地域的の発生にありては必ずしも5~6月の乾燥を伴わない様である。

月降水量 1~3月の各月降水量の多寡とその年の

発生との因連は認め得ない。大発生年の4、5月の降水量は概して多くなく、続く6月の降水量も全般的に見て少いことが注目される。そこで4~6月の降水総量の平年との比較を試みると、大発生年は表日本の各地を通じて概ね100ミリ以上(小地域的に平年に近い量を示す処も含まれる)300ミリ位少いことが観察される。

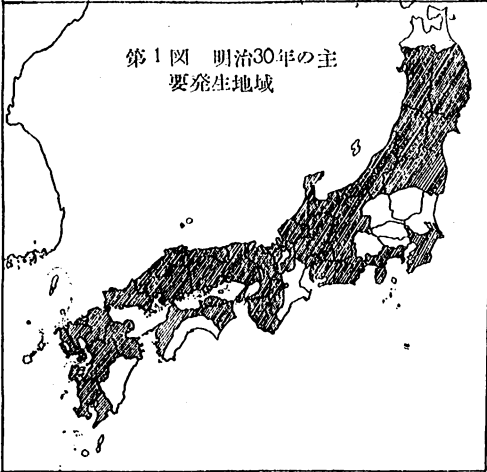
月日照時数 1~3月の各月日照時数と発生との間には因連を認めないが、発生年の4、5月は多照の場合が多い、大発生年の6月は常に著しい多照となつている。4~6月の合計日照時数を平年のそれと比較すると図の様に西南日本側には非常に多くなつている。

以上の気温、湿度、降水量、日照時数等を1月から8月まで大気象的に平年との偏りを見たのでは、4~6月が比較的低温で乾燥していること並に4~6月特に6月が寡雨多照であると云う気象状態はその夏即ち、7~8月にセジロ、トビイロウンカの発生をもたらす或種の因連を有する様に見受けられる。

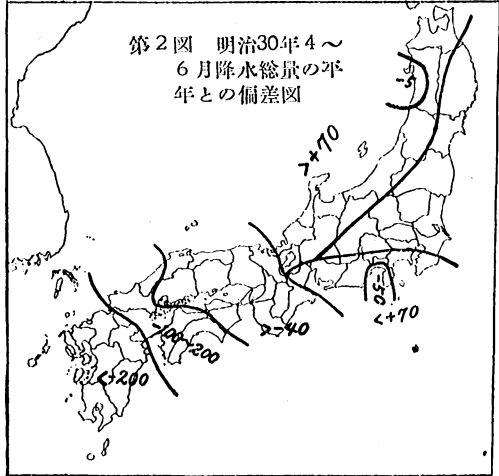
6月には梅雨の現象が現われるが、この梅雨が平常通りに訪げれないで、平年よりも可成りおくれて現われるか或は殆んど梅雨現象を見ない様な年の7~8月に多くの発生がある。発生年では寡雨多照の6月に続く7~8月は両月とも寡照であるか或は7、8月の中何れかの月が寡照である(例えば昭和9年の如く6月が寡雨多照でもその程度が非常に著しく且つ続く7、8月も甚だしい旱魃の場合には発生を見ない)。而して大発生が起るときは局地的ではなく表日本の全地域がこの様な異常気象に包まれていることを注目すべきであらう。

*浮塵子はセジロウンカ及びトビイロウンカを指す。

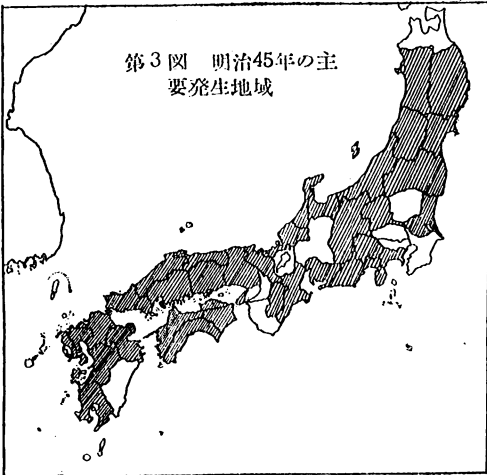
第1図 明治30年の主要発生地域



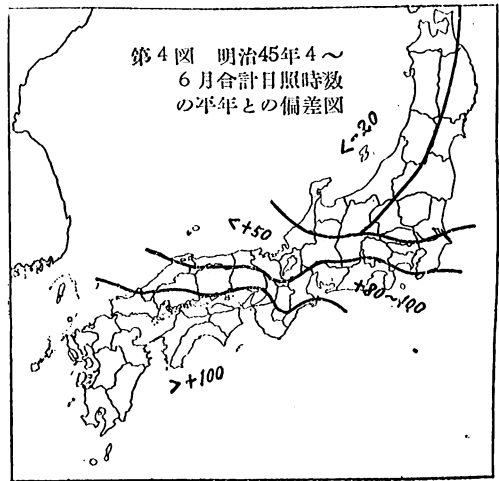
第2図 明治30年4～6月降水総量の平年との偏差図



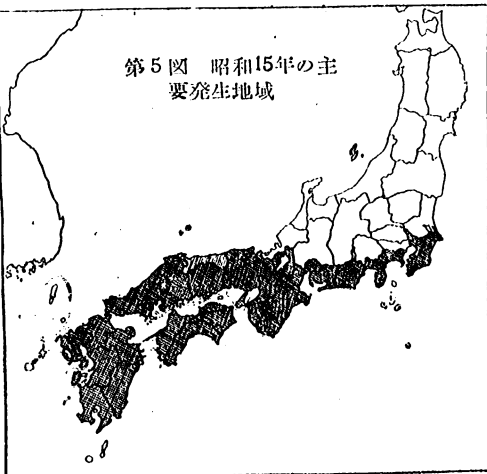
第3図 明治45年の主要発生地域



第4図 明治45年4～6月合計日照時数の平年との偏差図



第5図 昭和15年の主要発生地域



第6図 昭和15年4～6月合計日照時数の平年との偏差図

